

『オデュッセイア』第22巻の求婚者殺戮場面再考

——特にアンティノオスの死(8-21)と
エウリュマコスの死(69-88)をめぐって——

佐野好則

I はじめに

『オデュッセイア』第22巻の求婚者殺害場面には『イーリアス』の戦闘場面と共通の表現が数多く用いられていることが指摘されている*1。それは、オデュッセウスが弓矢を用いて剣しか持たない求婚者たちを殺すのみではなく、途中でオデュッセウスの矢が尽き、オデュッセウスの側にも求婚者たちの側にも槍、兜、楯がもたらされることにより、弓矢、剣、槍による様々な戦いの要素もこの場面に取り入れられたことによる。オデュッセウスが弓矢で求婚者たちを殺戮する段階(1-118行)が終わり、矢が尽きて兜と楯を身につけて槍で戦う段階(119行以下)の初めにはオデュッセウスの武装場面(*Od.* 22.119-125)が置かれている。この武装場面は『イーリアス』第15巻において弓で戦っていたテウクロスが、彼の弓の弦が切れ、槍で戦うために武具を身につける武装場面(*Il.* 15.478-483)との顕著な類似を示している*2。Usenerはこのことから、テウクロスの武装の描写を手本としてオデュッセウスの武装の描写が作られたと推測する*3。これが正しければ、館の広間(*μέγαρον*)で行われた求婚者殺戮に『イーリアス』の戦闘場面と共通する本格的な戦

*1 Jong (2001), 524 参照。Schröter (1950) は求婚者殺戮場面と『イーリアス』の戦闘場面との共通性に注目し、オデュッセウスによる求婚者殺戮が、『イーリアス』における英雄たちの武勇譚(アリスティア)にあたるものとして作られていると論じている。求婚者殺戮の最中に、アテーネーはオデュッセウスに対する叱責の言葉の中で、トロイア戦争における彼の武勇を思い起こさせるが(*Od.* 22.226-230)、ここには求婚者殺戮とトロイア平原での戦闘を結びつける観点が表れている。

*2 Russo, Fernández-Galiano, Heubeck (1992), ad *Od.* 22.122-5 参照。テウクロスとオデュッセウスの武装の描写は、より長い武装の描写(e.g. *Il.* 3.328-338 (パリス); *Il.* 11.16-46 (アガメムノン); *Il.* 16.130-9 (パトロクロス))の縮小版と考えられる。

*3 Usener (1990), 100-3。『イーリアス』第15巻のテウクロスの武装の描写と『オデュッセイア』第22巻のオデュッセウスの武装の描写の注目すべき類似点は以下の通りである。(1) 楯に関する行(*Il.* 15.479; *Od.* 22.122)の第2脚以後が同一であり、行末の *τετραθέλυμνον* という語はホメロス叙事詩の中で他に用例がない。(2) 兜に関する2行(*Il.* 15.480-1; *Od.* 22.123-4)が同一である。(3) この武装を境として使用する武具が弓矢から槍に移行する。

闘の色合いを与え「英雄化 (Heroisierung)*4」するため、オデュッセウスの武具の弓矢から槍への移行を導入する際に、『イーリアス』第15巻のテウクロスの武具の弓矢から槍への移行がヒントとなったという推測も成り立つであろう。このように、『オデュッセイア』第22巻における戦闘場面を『イーリアス』におけるそれと比較する場合に、共通する表現や定形句とともに、『イーリアス』の特定の箇所が手本となっている可能性も考慮に入れるべきである。

本論考においては、求婚者殺戮場面の中から、最初に殺されるアンティノオスと2番目に殺されるエウリュマコスの死の描写を取り上げて、『イーリアス』の戦闘場面との類似点および相違点の両面から検討する。この2人は求婚者たちのリーダー格の人物であり、彼らの死の描写は他の求婚者たちの場合よりも長いため、『イーリアス』の戦闘場面との類似点を他よりも多く含んでいる。彼らの死の場面について、『イーリアス』の戦闘場面との比較を通じて、従来の研究では十分に理解されていなかった特徴をあきらかにすることを本論考の目的としたい。

2 アンティノオスの死

ἦ καὶ ἐπ' Ἀντινώω ἰθύνετο πικρὸν οἶστόν.
 ἦ τοι ὁ καλὸν ἄλειςον ἀναιρήσεσθαι ἔμελλε,
 χρύσειον ἄμφωτον, καὶ δὴ μετὰ χερσὶν ἐνύμα, 10
 ὄφρα πίσι οἴνοιο· φόνος δέ οἱ οὐκ ἐνὶ θυμῷ
 μέμβλετο· τίς κ' οἴοιτο μετ' ἀνδράσι δαιτυμόνεσσι
 μοῦνον ἐνὶ πλέονεσσι, καὶ εἰ μάλα καρτερός εἶη,
 οἱ τεύξειν θάνατόν τε κακὸν καὶ κῆρα μέλαιναν·
 τὸν δ' Ὀδυσσεὺς κατὰ λαιμὸν ἐπισχόμενος βάλεν ἰῶ, 15
 ἀντικρὺ δ' ἀπαλοῖο δι' αὐχένος ἦλυθ' ἀκωκή.
 ἐκλίνθη δ' ἐτέρωσε, δέπας δέ οἱ ἔκπεσε χειρὸς
 βλημένου, αὐτίκα δ' αὐλὸς ἀνὰ ρίνας παχὺς ἦλθεν
 αἵματος ἀνδρομέοιο· θοῶς δ' ἀπὸ εἶο τράπεζαν
 ὥσε ποδὶ πλήξας, ἀπὸ δ' εἶδατα χεῦεν ἔραζε· 20
 σίτός τε κρέα τ' ὀπτὰ φορύνετο. ... (Od. 22.8–21)

彼 (オデュッセウス) は言った。そしてアンティノオスに鋭い矢を向けた。彼 (アンティノオス) は美しい盃を持ち上げようとしていた、金の、両耳のついたものを。そして両手の間で揺らしていた、ワインを飲むために。だが殺害は彼の心の中に思いうかばなかった。誰が考えるであろう、食事する者たちの間で、1人で大勢の中で、とても強い者だとしても、自分に悪しき

*4 Usener (1995), 102.

死と黒き命運とを引き起こすとは。だが彼（アンティノオス）をオデュッセウスは喉を狙って矢で射た。すると柔らかな頸を通って向こう側に切っ先が出た。彼は片側に傾き、盃は彼の手から落ちた、彼が射られると。そしてすぐ、人血の太い流れが鼻まで上ってあふれ出た。彼はすぐにテーブルを脚で蹴って自分から遠くへ押した。そして食べ物を地面に散らし、パンと焼いた肉は汚れた。

アンティノオスの死の描写の中で、『イーリアス』の戦闘場面に複数回の用例がある表現としては、オデュッセウスが矢の狙いを定める際に用いられる *πικρὸν οἴστον* (8)*5、そして矢がアンティノオスの喉に命中したことを表す *βάλεν ἰῶ* (15)*6 と、喉を射られたアンティノオスの様子を描写する 16 行全体*7 と、盃が手から落ちたことを述べる *ἔκπεσε χειρός* (17)*8 がある。それら以外にも、矢を受けたアンティノオスの身体の傾きを表す *ἐκλίθη δ' ἐτέρωσε* (17) も『イーリアス』に 1 回用例がある*9。『イーリアス』の戦闘場面と共通する表現は特に 15-17 行に集中している*10。

16 行と同一の詩行は『イーリアス』に 2 回に用いられている。エウポルボスの死 (*Il.* 17.49) とヘクトールの死 (*Il.* 22.327) である*11。特にヘクトールは『イーリアス』の主

*5 『イーリアス』に 3 回 (*Il.* 4.118; 5.110; 8.323 (すべて行末))、『オデュッセイア』には他に用例なし。主格の *πικρὸς οἴστος* は『イーリアス』に 7 回 (*Il.* 4.134; 4.217; 5.99; 5.278; 13.587; 13.592; 23.867 (すべて行末))、『オデュッセイア』には用例なし。

*6 『イーリアス』に 4 回 (*Il.* 8.81; 8.303; 13.586; 16.511 (すべて行末))、『オデュッセイア』には他に用例なし。

*7 『イーリアス』に 2 回 (*Il.* 17.49; 22.327)、『オデュッセイア』には他に用例なし。行末の *ἦλυθ' ἀκωκή* はこれら以外に『イーリアス』に 3 回 (*Il.* 5.16; 5.67; 16.478 (すべて行末)) 用いられる定形句であり、『オデュッセイア』には 22.16 以外に用例はない。*ἀκωκή* という語 (すべての変化形を含む) は『イーリアス』に 13 回 (5.16; 5.67; 10.373; 11.253; 13.251; 16.323; 16.478; 17.49; 17.295; 20.260; 21.60; 22.327; 23.821)、『オデュッセイア』には 2 回 (19.453; 22.16) 用いられている。それらのうちほとんどは槍の穂先に用いられており、矢の鏃に用いられているのは僅かに *Od.* 22.16 と *Il.* 13.251 のみである。Russo, Fernández-Galliano, Heubeck (1992), ad *Od.* 22.16 参照。

*8 『イーリアス』に 5 回 (*Il.* 3.363; 4.493; 8.329; 15.421; 15.465)、『オデュッセイア』には他に 2 回 (*Od.* 14.31; 14.34)。

*9 *Il.* 13.543。『オデュッセイア』には他に用例なし。

*10 *θάνατόν τε κακὸν καὶ κῆρα μέλαιναν* (14) と同じ表現が『イーリアス』に 1 回 (*Il.* 21.66) あり、『オデュッセイア』には他に用例がない。しかし、この表現と類似の (*τε κακὸν* を除いた) *θάνατον καὶ κῆρα μέλαιναν* は『オデュッセイア』に 4 回 (*Od.* 2.283; 3.242; 15.275; 24.127) 用例があるため (『イーリアス』には用例なし)、特に『イーリアス』の戦闘場面との共通性を作り出しているとはみなしえない。

*11 Russo, Fernández-Galliano, Heubeck (1992), ad *Od.* 22.16 は、『オデュッセイア』第 22 巻 16 行を、『イーリアス』の同一の 2 つの詩行を直接模倣して作られたものとみなす。エウポルボスは主要な英雄ではないが、『イーリアス』第 16 巻でパトロクロスに負傷させた (*Il.* 16.812-3) 点で、続いてパトロクロスに致命傷を与えたヘクトール (*Il.* 16.818-822) と結びつく。

人公アキレウスにとって、敵のトロイア勢中最も武勇優れた人物である。アンティノオスは求婚者たちの中の第 1 リーダーであり、オデュッセウスの敵である求婚者たちのうちで最も力の強い人物である点で、『イーリアス』におけるヘクトールと対応すると言えるであろう。

アキレウスから受けたヘクトールの致命傷の描写は以下の通りである。

φαίνεται δ' ἤ κληῖδες ἀπ' ὤμων αὐχέν' ἔχουσι,
 λαυκανίην, ἵνα τε ψυχῆς ὠκιστος ὄλεθρος·
 τῇ ῥ' ἐπὶ οἱ μεμαῶτ' ἔλασ' ἔγχει δῖος Ἀχιλλεύς,
ἀντικρὺ δ' ἀπαλοῖο δι' αὐχένος ἦλυθ' ἀκωκῆ
 οὐδ' ἄρ' ἀπ' ἀσφάραγον μελίη τάμε χαλκοβάρεια,
 ὄφρα τί μιν προτιείποι ἀμειβόμενος ἐπέεσσιν. (Il. 22.324-9)

すると鎖骨が頸、喉を肩から分けているところが露わになった。そこは命の最も速やかな死のもととなる。自分に向かつてはやる彼のまさにそこを神々しきアキレウスは槍で突いた。すると柔らかな頸を通して切っ先が反対側に出た。だが青銅をつけた槍は喉笛を切り裂かなかったため、彼（アキレウス）に言葉で答えて何かしら言うことができた。

下線をつけた 327 行に先行する 324-5 行に「鎖骨が頸 (αὐχὴν)、喉 (λαυκανίη) を肩から分けているところ」という急所の説明があり、また続く 328-9 行には槍が喉笛 (ἀσφάραγος) を切り裂かなかったためにヘクトールは死の間際に話すことができたという説明があることから、この行が置かれている文脈では喉／頸が注目されている。

『オデュッセイア』第 22 巻 16 行の同一の詩行の文脈にも喉／頸への注目が見出される。直前の 15 行でオデュッセウスが喉 (λαιμός) を狙って射たと述べられており。また 9-10 行でアンティノオスは盃を持ち上げようとしており、さらに 10-11 行では、ブドウ酒を飲もうと手で盃を揺らしていたと述べられる*12。このようにアンティノオスは頸を射られた時、まさにブドウ酒を飲もうとしていたことが強調されるのである。アンティノオスがブドウ酒を飲もうとする瞬間に（ブドウ酒がそこを流れ下るはずの）喉を射られて死ぬことは、宴の最中での死であることを印象づける*13。

アンティノオスの死の場面における、『イーリアス』の戦闘場面と顕著に相違する要素としては、しばしば宴での飲食に関わる事物への言及がなされることがあげられる。これ

*12 Od. 22.10 の小辞 δῆについて Ameis-Hentze (1900), ad loc. は “schon” (「既に、今やまさに」) の意味であると説明している。

*13 エウスタティオス (1920.23-4, ad Od. 22.83) はアンティノオスが喉を矢で射られたことは、「食い飲みしたことのゆえに (διὰ τὸ φάγον καὶ λαίμαργον)」相応しいと述べている。現代では Dimock (1989), 295 および Lateiner (1995), 237 もこれに似た解釈を提示している。

らは自分の死が迫っていることを知らずに*14 アンティノオスが盃を手に持ち上げている段階 (καλὸν ἄλεισον ... χρύσειον ἄμφωτον (9-10), δαιτυμόνεσσι (12)) と、矢を受けて盃を落とし*15、テーブルを蹴り倒す段階 (δέπας (17), τράπεζαν (19), εἶδατα (20), σῆτος τε κρέα τ' ὀπτά (21)) に分けられる。

矢を受けてからのアンティノオスについては、身体が傾き盃を落とし (17-18)、鼻から大量に出血し (18-19)、テーブルを蹴り倒した (19-20) とされる。Friedrich は『イーリアス』における主要な英雄の死の描写にはグロテスクな描写や大袈裟な動作は避けられ、マイナーな戦士たちの死の描写にそれらがみいだされる傾向があることを指摘している*16。鼻からの大量の出血やテーブルを足で蹴り倒したという描写は、アンティノオスを主要な英雄よりもマイナーな戦士として位置づけるものとみなすべきであろう。

3 エウリュマコスの死

τοῖσιν δ' Εὐρύμαχος μετεφώνεε δεύτερον αὖτις·
 “ὦ φίλοι, οὐ γὰρ σχήσει ἀνὴρ ὄδε χεῖρας ἀάπτους, 70
 ἀλλ' ἐπεὶ ἔλλαβε τόξον εὐξοον ἠδὲ φαρέτρην,
 οὐδοῦ ἄπο ξεστοῦ τοξάσσειται, εἰς ὃ κε πάντας
 ἄμμε κατακτείνῃ· ἀλλὰ μνησώμεθα χάριμης.
 φάσγανά τε σπάσσασθε καὶ ἀντίσχεσθε τραπέζας
 ἰῶν ὠκυμόρων· ἐπὶ δ' αὐτῷ πάντες ἔχωμεν 75
 ἀθρόοι, εἰ κέ μιν οὐδοῦ ἀπώσομεν ἠδὲ θυράων,
 ἔλθωμεν δ' ἀνὰ ἄστνυ, βοῆ δ' ὠκιστα γένοιτο·
 τῷ κε τάχ' οὗτος ἀνὴρ νῦν ὕστατα τοξάσσειτο.”
 ὡς ἄρα φωνήσας εἰρύσσατο φάσγανον ὄξυ,
 χάλκεον, ἀμφοτέρωθεν ἀκαχμένον, ἄλτο δ' ἐπ' αὐτῷ 80
 σμερδαρέα ἰάχων· ὁ δ' ἀμαρτῆϊ δίος Ὀδυσσεὺς
 ἰὸν ἀποπροΐει, βάλε δὲ στήθος παρὰ μαζόν,
 ἐν δὲ οἱ ἦπατι πῆξε θοὸν βέλος· ἐκ δ' ἄρα χεῖρὸς
 φάσγανον ἦκε χαμᾶζε, περιρρηδῆς δὲ τραπέζῃ
 κάππεσεν ἰδνωθείς, ἀπὸ δ' εἶδατα χεῦεν ἔραζε 85
 καὶ δέπας ἀμφικύπελλον· ὁ δὲ χθόνα τύπτε μετώπῳ
 θυμῷ ἀνιάζων, ποσὶ δὲ θρόνον ἀμφοτέροισι
 λακτίζων ἐτίνασσε· κατ' ὀφθαλμῶν δ' ἔχτυτ' ἀχλύς. (Od. 22.69-88)

*14 ヘクトールについても自らの死が迫っていることに気がついていないとのゼウスの言葉がある (Il. 17.200-8)。アンティノオスの死とヘクトールの死の結びつきとの関連において注目すべきであろう。

*15 ἔκπεσε χεῖρός (Od. 22.17) と同一の表現が『イーリアス』の戦闘場面で用いられる時の主語は剣 (ξίφος: 3.363)、死体 (νεκρός: 4.493)、弓 (τόξον: 8.329; 15.465)、松明 (δαλός: 15.421) である。『オデュッセイア』では錫杖 (σκήπτρον: 14.31)、皮革 (σκῦτος: 14.34) である。

*16 Friedrich (1956), 31 (Eng. tr. (2003), 24).

そして彼らの間でエウリュマコスが2度目にまた話しかけた。「友らよ、この男はうち勝ち難い腕を止めることはあらず、よく磨かれた弓と矢筒を取ると、磨かれた敷居より射るだろう、われらすべてを殺すまで。さあ戦いを思い起こそう。剣を抜け、テーブルを掲げ持て、速き死をもたらす矢に対して。そして彼に対してわれらすべてが向かおう、集まって。もし彼を敷居と戸口から押しおろし、町中に行き、すぐに助けを呼び求めれば、そうすればすぐにもこの男が矢を射るのもはや最後となろう。」こう言うと、鋭い剣を抜いた、青銅製の、諸刃の剣を。そして彼（オデュッセウス）に跳びかかった、恐ろしく叫びつつ。他方同時に神のごときオデュッセウスは矢を放ち、胸に、乳のそばに射当てた。そして速き矢は肝臓に突き刺さった。すると彼（エウリュマコス）は手から剣を地面へ落とし、弓なりにテーブルに身を屈して倒れた。そして食物を地面に散らした、また両耳のついた盃を。そして彼（エウリュマコス）は地面を額で打っていた、心に苦しみつつ。また両足で椅子を蹴りつつ揺らしていた。そして霧が目に注がれた。

この描写中には、『イーリアス』の戦闘場面と共通の表現が数多く見出される。求婚者たちに呼びかけるエウリュマコスの言葉（70-8）の中では、オデュッセウスの手を表す *χείρας ἀάπτους* (70)*17 および彼の弓と矢筒にそれぞれ用いられる *τόξον ἐύξοον* (71)*18 と *ἠδὲ φαρέτρην* (71)*19 は『イーリアス』の戦闘場面に複数回用いられている。またエウリュマコスが求婚者たちに戦いを呼びかける際の表現 *μνησώμεθα χάριμης* (73) も『イーリアス』の戦闘場面において2度用いられている*20。さらに *εἰς ὃ κε πάντας* (72)*21 と *ἰὼν ὠκυμόρων* (75)*22 については類似表現が『イーリアス』の戦闘場面での英雄の発言の中に

*17 『イーリアス』に7回 (*Il.* 7.309; 11.169; 12.166; 13.49; 13.318; 17.638; 20.503)、『オデュッセイア』には他に2回 (*Od.* 11.502; 22.248) 用いられている (すべて行末)。

*18 『イーリアス』に2回 (*Il.* 4.105; 13.594)、『オデュッセイア』では他に6回 (*Od.* 19.586; 21.92; 21.281; 21.286; 21.326; 21.336) 用いられている (すべて3脚目初めから4脚目終わりまで)。『オデュッセイア』の用例は第21巻の弓競技の描写に集中している。

*19 『イーリアス』には2回 (*Il.* 10.260; 15.443)、『オデュッセイア』には他に3回 (*Od.* 21.59; 21.233; 22.2) 用いられている。『オデュッセイア』の用例は21巻と22巻に集中している。

*20 *Il.* 15.477; 19.148。『オデュッセイア』には他に用例なし。

*21 類似表現 *εἰς ὃ κε πάντες* が『イーリアス』に1回 (*Il.* 21.133 (アキレウスの発言)) 用いられている。『オデュッセイア』にはない。

*22 類似表現 *ἰὼι ὠκύμοροι* (主格) が『イーリアス』に1回 (*Il.* 15.440-1 (大アイアースがテウクロスに言う言葉)) 用いられている。形容詞 *ὠκύμορος* は『イーリアス』においてはこの箇所以外すべてアキレウスについて「若くして死ぬ」の意味で用いられている (*Il.* 1.417; 1.505; 18.95; 18.458)。『オデュッセイア』では22.75以外ではすべて求婚者たちについてやはり「若くして死ぬ」の意味で用いられている (*Od.* 1.266; 4.346; 17.137 (これら3行は行全体が同一))。

1 回ずつある。

エウリュマコスがオデュッセウスに立ち向かって殺される描写 (79-88) において、まずエウリュマコスが発言を終えて剣を抜くことを述べる 79 行全体が『イーリアス』の戦闘場面に 1 回用いられており*23、この行の終わりの *φάσγανον ὀξύ* の部分については『イーリアス』の戦闘場面で他に 2 回用いられている*24。そしてオデュッセウスに対して立ち向かうエウリュマコスの叫び声を表す *σμερδαλέα ἰάχων* (81)*25 は『イーリアス』の戦闘場面に用いられる定形句である。

オデュッセウスがエウリュマコスを射たことを述べる *βάλε δὲ στῆθος παρὰ μαζόν* (82)*26、エウリュマコスが剣を落としたことを述べる *ἐκ δ' ἄρα χειρός* (83)*27 および *ἦκε χαμᾶζε* (84)*28 には同一の表現や類似の表現が『イーリアス』の戦闘場面に複数回見出される。彼の死を示す *κατ' ὀφθαλμῶν δ' ἔχυντ' ἀχλὺς* (88)*29 については類似表現が『イーリアス』の戦闘場面に複数回用いられている。また *θυμῶ ἀνιάζων* (87) は『イーリアス』の戦闘場面に 1 回用いられている*30。

これらのうち、まずエウリュマコスが求婚者たちに呼びかける *μνησώμεθα χάρις* (73) に注目したい。この表現は『イーリアス』において 2 回用いられている。『イーリアス』第 15 巻では、テウクロスの弓の弦が切れた際に大アイアースが彼に向かい、槍で戦うよう促す科白の最後にこの表現が用いられている (*Il.* 15.477)。1 語前から含めて *ἀλλὰ μνησώμεθα χάρις* という、masculine caesura の後全体が *Od.* 22.73 と同一である*31。もう 1 つの用例は『イーリアス』第 19 巻でアガ멤ノンから和解の贈り物の申し出を受けた時に、アカイア勢が戦闘を早く開始することを求めるアキレウスの科白の中にある (*Il.* 19.148)。エウリュマコスが述べるこの表現は、彼の発言を『イーリアス』の主要な英雄が述べる戦闘への奨励 (*parainesis*) と結びつけると言うことができる。

*23 *Il.* 22.306. 『オデュッセイア』には他に用例なし。

*24 *Il.* 1.190; 22.311. 『オデュッセイア』には他に用例なし。

*25 『イーリアス』に 7 回 (*Il.* 5.302; 8.321; 16.785; 19.41; 20.285; 20.382; 20.443) 用いられており、『オデュッセイア』には他に用例なし。

*26 類似表現 *βάλε στῆθος παρὰ μαζόν* が『イーリアス』に 2 回 (*Il.* 8.121; 8.313) 用いられている。『オデュッセイア』にはない。

*27 『イーリアス』に 2 回 (*Il.* 11.239; 13.529) 用いられている。『オデュッセイア』には他に用例なし。

*28 『イーリアス』に 3 回 (*Il.* 8.134; 12.205; 17.299)、『オデュッセイア』には他に 1 回 (*Od.* 16.191) 用いられている。

*29 『イーリアス』に類似表現 *κατὰ δ' ὀφθαλμῶν κέχυντ' ἀχλὺς* が 2 回 (*Il.* 5.696; 16.344)、*κατ' ὀφθαλμῶν χέεν ἀχλὺν* が 1 回 (*Il.* 20.321) 用いられている。『オデュッセイア』にはない。

*30 *Il.* 21.270. 『オデュッセイア』には他に用例なし。

*31 前述のようにテウクロスが武器を弓矢から槍に変えた際の武装場面は『オデュッセイア』第 22 巻におけるオデュッセウスの武装場面の手本とみなしうる (注 3 参照)。

エウリュマコスが求婚者たちへの言葉を終えてオデュッセウスに立ち向かう時の描写 *ὡς ἄρα φωνήσας εἰρύσσατο φάσγανον ὄξύ* (79) は、ヘクトールが『イーリアス』第 22 巻でアキレウスに立ち向かう時の描写 (*Il.* 22.306) と同一の行となっている。ヘクトールはアキレウスとの対決の中で、まずはアキレウスから逃れようとトロイアの周囲を 3 周走る (*Il.* 22.131-207)。女神アテーネーが、ヘクトールの兄弟デーイポボスの姿をとって現れると、ヘクトールはだまされて兄弟が助力に来てくれたと思いアキレウスに立ち向かう (*Il.* 22.226-259)。ヘクトールは槍を投げるが、アキレウスの楯を貫くことができずはね返されると、別の槍を求めてデーイポボスと呼んだがその姿はなかった (*Il.* 22.289-295)。ヘクトールは女神アテーネーによってだまされたことを悟ったと述べる (*Il.* 22.296-305)。その直後にヘクトールが剣を抜いてアキレウスに立ち向かう描写に、『オデュッセイア』第 22 巻でエウリュマコスがオデュッセウスに立ち向かった時と同じ行が用いられているのである (*Il.* 22.306 = *Od.* 22.79)。

『イーリアス』第 22 巻でのヘクトールは、槍を持つアキレウスに対して、仕方なく剣で立ち向かう。ヘクトールが使った武器が剣であることは 306 行の行末の *φάσγανον ὄξύ* と同一の表現が 311 行にも繰り返されていることにより強調されている*32。『オデュッセイア』第 22 巻におけるエウリュマコスも、より有利な武器 (弓矢) を持つ、より強い英雄 (オデュッセウス) に対して、仕方なく剣で立ち向かう点でヘクトールと似た状況に置かれている*33。

剣を持って跳びかかるエウリュマコスに対してオデュッセウスは矢を放つ。その矢はエウリュマコスの胸に当たり、肝臓 (*ἥπαρ*) に突き刺さったとされる (*Od.* 22.82-3)*34。

エウスタテイオス (1920.22, ad *Od.* 22.83) は、肝臓を射られたことはエウリュマコスの情欲による (*διὰ τὸ τοῦ Εὐρυμάχου κατ' ἔρωτα ἐπιθυμητικόν*) という解釈を示している。肝臓を欲望や情欲の座とみなす明確な証言は後世にしかないが、この考え方は『オデュッセイア』第 11 巻の冥府場面でレートーに乱暴をはたらこうとしたために禿鷹に肝臓をつつかれているティテュオス (*Od.* 11.576-581) の描写の背景にあるのかもしれない*35。あ

*32 『イーリアス』では *φάσγανον ὄξύ* という表現が用いられているのは第 22 巻のこれら 2 箇所以外には 1 回のみ (*Il.* 1.190)。『オデュッセイア』では 22.79 以外に 3 回 (*Od.* 10.145; 11.95; 22.90) 用いられている。

*33 Schröter (1950), 23 参照。

*34 *ἐν δὲ οἱ ἥπατι πῆξε* (*Od.* 22.83) は『イーリアス』の戦闘場面には用いられないが、*ἐν δὲ μετώπῳ πῆξε* という表現が 2 回 (*Il.* 4.460; 6.10) 用いられている。*μετώπῳ* と *οἱ ἥπατι* を入れ替えてエウリュマコスの肝臓に矢が刺さる表現が作られたのかもしれない。

*35 Laser (1983), 46-7 参照。肝臓を欲望の座とする考えは [ロクリスのティーマイオス] (プラトーン『ティーマイオス』に基づく偽書) 100a およびプルータルコス *De Virt. Mor.* 45of にある (ともに後 1 世紀)。肝臓を愛欲 (*ἔρως*) の座とする考えはテオクリトス 11.16; 13.71 や *Anacreontea* 33.27-8 にある。Hunter (1999), ad Theoc. 11.16 (Hunter はこの箇所を *Od.* 22.83 の模倣とする。) および ad 13.71 参照。

るいは、ヘーシオドス『神統記』においてプロメーテウスがゼウスからの罰としてやはり肝臓を鷹によってつつかれていること (*Theog.* 523-5) や、『イーリアス』第24巻でヘカベーがヘクトールを殺され死体を引きずり回されたことへの復讐としてアキレウスの肝臓を食らいたいと述べること (*Il.* 24.212-4) をも考慮に入れると、肝臓を傷つけられることには罰や復讐との連想が働いているのかもしれない。そうであれば、エウリュマコスが肝臓を射られたことは、オデュッセウスによって加えられる罰ないし復讐との連想を喚起するものとみなしうるであろう。

肝臓に矢を受けたエウリュマコスは持っていた剣を床に落とし、テーブルの上に倒れ、そこに載っていた食物や盃を床に散らす (83-6)。ここには宴に関わる事物への言及が重ねられている (*τραπέζῃ* (84), *εἶδατα* (85), *δέπας ἀμφικύπελλον* (86))。また85行目後半の *ἀπὸ δ' εἶδατα χεῖεν ἔραζε* はアンティノオスの死の描写中の20行後半と一致する。アンティノオスとエウリュマコスはともに求婚者たちのリーダー格であり、オデュッセウスによって射殺され、飲食物を地面に散らす、20行と85行の表現の一致により両者の共通性が強調される^{*36}。

エウリュマコスがテーブルの上に倒れる際の描写には *περιρρηδής* (84) という形容詞と *ἰδνωθείς* (85) という分詞が用いられている。*περιρρηδής*^{*37} は身を弓なりにしてテーブルにおおいかぶさっていることを、*ἰδνωθείς*^{*38} の方は身を屈した状態にあることを指す。エウリュマコスがうつ伏せにテーブルの上に倒れ、一方に足が、他方に上半身が垂れ下がり、身体が折れて弓なりにになっている姿の描写と思われる。このテーブルは低い(膝くらいの高さの?) それ程大きくないテーブルと考えるとよい^{*39}。テーブルの上にあった食物や盃を押しつけて、エウリュマコスの身体がそれらと入れ替わったことになる。

テーブルの上に倒れたエウリュマコスは、心に苦しみつつ額で地面を打ち、足で椅子を

*36 Lateiner (1995), 237: "Cup, bread, and meat are likewise spilt, spoiled, and scattered by his [Antinoos'] clone, Eurymakhos." Jong (2001), 524-5 は、2つの類似の出来事がペアをなす 'symmetrical structure' が『オデュッセイア』第22巻の求婚者殺戮場面全体に行きわたっていることを指摘する。アンティノオスの死とエウリュマコスの死は、この 'symmetrical structure' の最初に現れる要素である。

*37 ホメロス叙事詩における *περιρρηδής* の用例は他にはない。この語の後半の *-ρηδής* の部分は *ῥαδινός* (「しなやかな(筈)」(*Il.* 23.583)) や *ῥοδανός* (「なびく(葦の茂み)」(*Il.* 18.576)) と同語源とみなされる。W. Beck, s.v. 'περιρρηδής', *Lexikon des frühgriechischen Epos* および Russo, Fernández-Galliano, Heubeck (1992), ad *Od.* 22.84 参照。

*38 *ἰδνόμαι* の意味は "to bend oneself forwards or backwards, double oneself" (I. J. F. de Jong, s.v. 'ἰδν(όμαι)', *Lexikon des frühgriechischen Epos*). *Od.* 22.85 には *ἰδνωθείς* の異読として *δινηθείς* (< *δινώω* 「回す」) と *διωθείς* (< *διώω* 「(ろくろで)回転させる」(古代の用例なし)) がある。*δινηθείς* が主要写本の読みであるが、意味上これらの動詞はこの文脈には合わず、*ἰδνωθείς* が本来の読みとみなされる。Van der Valk (1949), 48 参照。

*39 Ameis-Hentze (1964), ad *Od.* 22.86 参照。

蹴って揺らした。

ὁ δὲ χθόνα τύπτει μετώπῳ
θυμῷ ἀνιάζων, ποσὶ δὲ θρόνον ἀμφοτέροισι
λακτίζων ἐτίνασσε· (86–8)

『イーリアス』においてこのように戦士が倒れて額で地面を打つことは 1 度もない。従ってこの描写は『イーリアス』の戦闘場面との相違点となるが、先行研究においてはこの点の重要性が十分に認識されていないと思われる。『イーリアス』においては戦士は戦場において兜を頭につけているので、倒れる時に直接額が地面を打つことはない*40。エウリュマコスが額で地面を打ったという描写には、彼が兜を被っていなかったことが反映されている*41。

エウリュマコスが地面を額で打った動作、さらには足で椅子を蹴った動作には、心に苦しみつつ (θυμῷ ἀνιάζων) という分詞句が添えられていることから*42、これらの動作が死に際の身悶えによるものであることが示されていると思われる。テーブルの上に身を屈して倒れ、頭で地面を打ち、足で椅子を蹴って揺らす姿は*43、Friedrich が『イーリアス』の戦士の死の描写の文体として ‘Phantasmata’ と名づけた、現実から離れたスペクタクルの範疇に近づくものである*44。

このように矢傷の苦しみに身悶えしつつ死にゆくエウリュマコスの身体が、テーブルの

*40 この点は Jona Rosenberg 氏より指摘を受けた。

*41 『オデュッセイア』第 22 巻では、さらに 2 回、94 行 (アンピノモス) と 296 行 (レーオクリトス) において、求婚者が倒れて額で地面を打ったことが同一の表現 (χθόνα δ' ἤλασε παντὶ μετώπῳ) を用いて述べられている。

*42 θυμῷ ἀνιάζων は『イーリアス』に 1 回用いられている (Il. 21.270 (河神クサントスの追撃から逃れようとするアキレウス))。『オデュッセイア』には他に用例はない。

*43 Russo, Fernández-Galliano and Heubeck (1992), ad *Od.* 22.84–8: “There he lies bent double, head on the ground (the table must be low) and feet kicking the still-standing chair in his death-agony, a pathetic and spectacular sight.”

*44 Friedrich (1956), 11–29 (Eng. tr. (2003), 7–22) 参照。エウリュマコスの身体が地面に横たわっているのではなく低いテーブルの両側に上半身と下半身がそれぞれ垂れ下がっていること、θυμῷ ἀνιάζων (87) という分詞句が添えられていること、定動詞 τύπτει (86) と ἐτίνασσε (88) が未完了過去時制であり、分詞 λακτίζων が現在時制であることを考え合わせると、彼が額で地面を打ち、足で蹴って椅子を揺らしたのは一度だけではなく繰り返し行われた動作と考えるべきであろう。Harrison (1991), ad *Aeneid* 10.348–9 は『アエネーイス』第 10 巻においてドリュオプスが死ぬ際に額で地面を打った死の描写 (at ille / fronte ferit terram (*Aen.* 10.348–9)) が『オデュッセイア』第 22 巻におけるエウリュマコスの死の描写 (ὁ δὲ χθόνα τύπτει μετώπῳ (*Od.* 22.86)) の模倣であることを指摘し、これら両箇所において ‘graphic alliteration to mark the head hitting the ground’ が見出されるとする。94 行 (アンピノモス) と 296 行 (レーオクリトス) において額で地面を打つ動作が描写されるが (注 41 参照)、それらの場合の定動詞 ἤλασε は (1 回の動作を表す) アオリスト時制であり、エウリュマコスの場合のような断末魔の苦しみによる動作というニュアンスはない。さらに注 46 参照。

上の飲食物を押しつけて、それに代わる位置に置かれていることに注意を向けるべきである。オデュッセウスの財産である家畜を大量に屠らせたことが求婚者たちの *ἀτασθαλίαι* に含まれることは、第 22 卷のエウリュマコスに先立つオデュッセウスとエウリュマコスの言葉において明確に示されている。オデュッセウスは求婚者たちの罪科を列挙する際 (35-41) に、家の財産を浪費したこと (*κατεκείρετε οἶκον*) を第一にあげている。そしてエウリュマコスは弁明の言葉 (45-59) の中で、求婚者たちが広間と野で行った限りの非道な行い (*ἀτάσθαλα*) についてオデュッセウスが述べたことは正当 (*αἰσίμα* (46)) であると認め、責任を既に殺されたアンティノオスに負わせて命乞いをし、飲み食いした分を弁償すると述べる。

... ἀτὰρ ἄμμες ὄπισθεν ἀρессάμενοι κατὰ δῆμον,
ὄσσα τοι ἐκπέποται καὶ ἐδήδοται ἐν μεγάροισι,
 τιμὴν ἀμφὶς ἄγοντες ἑικοσάβοιον ἕκαστος,
 χαλκὸν τε χρυσὸν τ' ἀποδώσομεν, εἰς ὃ κε σὸν κῆρ
 ἰανθῆ... (55-59)

だが、われわれは後で国中で償いをして、広間で飲まれ食べられた限りのものについて、それぞれが別々に牛 20 頭分の値の、青銅と黄金を持って来て差し上げましょう、あなたの心がなだめられるまで。

オデュッセウスはこの弁償の申し出を拒絶し、エウリュマコスに対して、求婚者たちがすべての悪事を償うまで殺戮から手を引くことはない (63-4) と述べる。以上のやり取りの後で、テーブルの上の飲食物と入れ替わった位置で、胸から肝臓に達する矢を受けて悶絶しつつ死んでゆくエウリュマコスの死の描写は、この死が求婚者たちの *ἀτασθαλίαι* に対する罰と密接に結びつくことを鮮明に表すものとなっているといえることができるであろう*45。

*45 Dimock (1989), 298: "Eurymachos's death, like Antinoos's, has its appropriateness to his crime: he falls curled about his table, spilling the meat and drink as Antinoos did, and as he lies on his face on the ground, his spasmodically kicking heels shake his chair." 本論考はこの解釈に、死にゆくエウリュマコスの身体が、求婚者たちの *ἀτασθαλίαι* の具体的な現れである宴での飲食物に、位置的に入れ代わることにより、エウリュマコスの死と求婚者たちの *ἀτασθαλίαι* に対する罰との結びつきを強く意識させるものとして描かれていることを付け加える。死の描写にこれまでの生き方が反映されているという点との関連において、『イーリアス』のマイナーな戦士たちの死の描写にしばしば生きていた時の短いエピソード ('obituary') がはさまれることを思い起こしてもよいかもしれない。Griffin (1980), 103-143 参照。

4 まとめ

本論考で検討したアンティノオスとエウリュマコスの死の場面には、『イーリアス』の戦闘場面と共通の表現がちりばめられており、特にアンティノオスの負傷、エウリュマコスによる戦いへの奨励の言葉、エウリュマコスがオデュッセウスに立ち向かう姿と射られて剣を落とす姿などが、『イーリアス』の戦闘場面における戦士たちのイメージと結びつく。

さらにアンティノオスの喉の負傷の描写の行 (*Od.* 22.16) とエウリュマコスが発言を終え剣を抜く描写の行 (*Od.* 22.79) が、それぞれヘクトールが『イーリアス』第 22 巻でアキレウスと対決する際に受ける喉の負傷の描写の行 (*Il.* 22.327) とヘクトールがアテーネーにだまされたことを悟った発言の後で剣を抜く描写の行 (*Il.* 22.306) と同一の詩行であることは注目すべきであると思われる。『オデュッセイア』の全体構成の中で主人公オデュッセウスと求婚者たちとの対決は、『イーリアス』の全体構成の中での主人公アキレウスとヘクトールの対決と対応するが、求婚者たちの中でもアンティノオスとエウリュマコスの 2 人が最も主要なリーダー格である。アンティノオスとエウリュマコスの死にいたる姿が『イーリアス』の様々な英雄たちのイメージと重ねられていることとともに、特に『イーリアス』で主人公と対決したヘクトールの死と重ね合わせられていることも考慮すべきである。

他方、アンティノオスとエウリュマコスの死の描写には、『イーリアス』の英雄たちの姿と結びつけて「英雄化」する方向性と並んで、テーブルや食物や盃など宴に相応しいものへの言及を豊富に盛り込むことにより、『イーリアス』の戦闘場面のイメージから引き離す方向性があることにも注目しなければならない。さらにアンティノオスが鼻から大量に出血し足でテーブルを蹴り倒す様子や、エウリュマコスがテーブルの上に倒れかかり、額で地面を打ち足で椅子を蹴り続ける様子は、『イーリアス』の主要な英雄たちの威厳ある死のイメージからは大きく外れている*46。

求婚者たちの死は、『イーリアス』の戦闘場面と共通の表現により「英雄化」されるにしても、実質としてはオデュッセウスの館の財産を浪費しつつ広間で宴会をしていた場で殺

*46 アンティノオスは矢を受けて倒れる際にテーブルを脚で蹴って自分から遠くへ押すが (*Od.* 22.19–20)、ここに用いられた定動詞「押した (*ῥωε*)」も分詞「蹴って (*πλήξας*)」もアオリストであることから、この動作は 1 回的なものとみなすべきである。エウリュマコスの死の描写では、アンティノオスの場合には明示的でなかった死の直前の身悶えの動作が明示的に示され強調されている。倒れる際にテーブルを蹴り倒して食物を床に散らすアンティノオスの動作と、テーブルの上に倒れ食物を押しつけ額で地面を打ち椅子を脚で蹴って揺らし続けるエウリュマコスの動作の間には顕著な類似点があるが (注 36 参照)、同時に後者がより印象的に示されており *auxesis* の効果がみいだされることにも注意すべきである。

戮されるのである。アンティノオスとエウリュマコスの死の描写においては、テーブルや食物や盃等が頻繁に言及され、求婚者たちがオデュッセウスの館で行ってきた ἀπασθαλίαが映し出されている。彼らの死が『イーリアス』の戦闘場面と共通の表現によって「英雄化」されているために、自らの ἀπασθαλίαに対する罰として死ぬという実質は、顕著な落差として印象的に提示されているとみなすことができるであろう*47。

(国際基督教大学)

参照文献

- Ameis, K. F. – Hentze, C., *Homers Odyssee*, zweiter Band, zweiter Heft, zehnte Auflage, Leipzig, 1964.
- Dimock, G. E., *The Unity of the Odyssey*, Amherst, 1989.
- Friedrich, W. H., *Verwundung und Tod in der Ilias*, Göttingen, 1956. (English translation by G. Wright and P. Jones, preface by P. Jones, appendix by K. B. Saunders, *Wounding and Death in the Iliad*, London, 2003.)
- Hunter, R., *Theocritus: A Selection*, Cambridge, 1999.
- Griffin, J., *Homer on Life and Death*, Oxford, 1980.
- Jong, I. de, *A Narratological Commentary on the Odyssey*, Cambridge, 2001.
- Laser, S., *Archaeologia Homerica: Medizin und Körperpflege*, Göttingen, 1983.
- Lateiner, D., *Sardonic Smile: Nonverbal Behavior in Homeric Epic*, Ann Arbor, 1995.
- Richardson, N., *The Iliad: A Commentary*, vol. 6, Cambridge, 1993.
- Russo, J., Fernández-Galliano, M., Heubeck, A., *A Commentary on Homer's Odyssey*, vol. 3, Oxford, 1992.
- Harrison, S. J., *Vergil: Aeneid 10*, Oxford, 1991.
- Schröter, R., *Die Aristie als Grundform homerischer Dichtung und der Freiermord in der Odyssee*, Marburg 1950.
- Usener, K., *Beobachtungen zum Verhältnis der Odyssee zur Ilias*, Tübingen, 1990.
- Van der Valk, M. H. A. L. H., *Textual Criticism of the Odyssey*, Leiden, 1949.

*47 2名の査読者より多くの有益な指摘をいただいたことに感謝する。